

# I 研究の概要

## 1 研究主題

外国語によるコミュニケーションを図る素地となる資質・能力の育成

## 2 主題設定の理由

### (1) 本校の教育目標・児童の実態から

本校は、創立36周年を迎えた20学級、591名の児童数の学校である。(令和元年9月1日現在) 学校教育目標として、「自らの可能性を拓く子どもの育成」を掲げ、日々の教育活動を行っている。目指す子供の姿は、下記のとおりである。

- かしこく
  - ・主体的に考え、力をあわせて学ぶ児童
  - ・聞く力・書く力・話す力を備えた児童
- やさしく
  - ・他人のよさや努力を認めあえる児童
  - ・思いやる行動ができる児童
- たくましく
  - ・主体的に心身をきたえる児童
  - ・健康で安全な生活をしようとする児童

学校教育目標の具現化を図るためには、人と関わり合う力を育てていくことが重要であると考え。本校では、子供の望ましい人間関係を構築するために、学年・学級の枠を越えた交流学习や交流活動を意図的に多く取り入れている。そのため、子供と子供、教師と子供との関係も良好であり、子供たちは明るく素直である。自分の意見や考え方を相手に分かりやすく伝えたり、相手の意見を理解しながら聞いたりする力が育ってきているが、状況に合わせて対応することはやや苦手である。

そこで、英語活動をコミュニケーションの大切さを学ぶ機会の一つとして捉え、その中で協調・共生できる力の素地を育成する場を設定していきたいと考えた。

### (2) 時代の要請から

社会のグローバル化が急速に進展する中で、次世代を担う子供たちにとって英語教育の拡充強化はますます重要な課題になっている。数年前から始まった小学校における外国語活動についての議論・実践も進み、我々教職員と子供たちが向かっていくゴールが見え始めたところである。

新学習指導要領の先行実施が開始され、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」として、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と中央教育審議会の答申で明記されているように、子供たちには広い視野をもちながら多角的に物事を判断し自分の考えを発信することが求められる。

このような時代の要請から、英語活動を通じたコミュニケーション能力の重要性を認識し、研究主題を設定した。本校は、外国語活動を1年生は年間34時間、2年生～4年生は年間35時間、5・6年生は、70時間実施している。

英語活動においては、児童のもつ柔軟な適応力を生かし、言葉への自覚を促し、幅広い英語に関する能力や国際感覚の基盤を培うことが重要である。コミュニケーション能力の素地の育成を図るためには、まずは積極的に相手の言葉に耳を傾けて、相手のことを理解しようという態度を身に付けることが必要である。さらには、日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、自国の言語や文化との相違を感じることも大切なことである。そうした経験を経て、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感させながら、自分の思いを伝えようとする態度を育成していきたいと考えている。

### 3 これまでの研究

八千代市では、小学校1年生から学年に応じて、英語活動を実践している。本校は、平成25年度から八千代市教育委員会より小学校英語活動の研究指定を受け、「英語活動を通したコミュニケーション能力の素地の育成」を研究主題に掲げて取り組んでいる。

初年度からALT (Assistant Language Teacher)やCTA(Community Teaching Assistant)の協力を得て、活動を進めてきた。CTAとは、八千代市独自の名称で、市のボランティアとして登録された英語活動助手のことである。地域の人材を学校教育に生かすため、市内の各小学校に配置されている。完全なボランティアにも関わらず、さまざまな人材が集まり、堪能な語学力と経験で、子供たちを疑似的に異文化に触れさせている。今までの蓄積と新しい感性を発揮してもらいながら授業を進めている。

本校ではHRT (Home Room Teacher=担任)が主体となって活動を進める授業を提案してきた。それぞれの教師がこれまでの実践を踏まえ、仮説実証の手立てを考え研究授業を行った。研究授業後には、その手立てについて検証し、今後の授業の改善に努めている。このように、全職員が、意識をもって授業に取り組むことにより、本校なりの授業の形態・進め方を共通理解することができた。今後もさらに研究を深めていきたいと考えている。

### 4 実践の目標

英語活動の特性を生かして、児童が興味・関心をもって、自分の思いや考えを相手に伝える活動になるように全学年の共通理解を図り、授業を実践する。

学年別の目標（八千代版CAN-DOリスト）より抜粋）P10参照

《低学年》外国語活動を通して、コミュニケーションへの興味・関心を高める。

- (1) 自分自身の好きなものについて、ジェスチャーを用いながら、相手に伝える体験をする。
- (2) 外国語の音声やリズムに慣れ親しむ。
- (3) 日本と外国のさまざまな行事や習慣に触れる。

《中学年》英語を使って人とのふれあいを楽しむ。

- (1) 身近な場面での会話に慣れ親しみ、適切に反応しようとする。
- (2) 基本的な表現を用いて、自分の好みや要求をなど自分の考えや気持ちなどを伝え合おうとする。
- (3) 外国語の音声やリズムに慣れ親しむとともに、外国語と日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く。
- (4) 外国の生活、習慣、行事などを知り、多様なものの見方があることに気付く。

《高学年》英語で伝え合うことや相手を理解することを楽しむ。

- (1) 日常生活の様々な場面の会話に慣れ親しみ、適切に反応しようとする。
- (2) 基本的な語句や表現を用いて、自分の好みや要求をなど自分の考えや気持ちなどを伝え合おうとする。
- (3) 外国語の音声的特徴に慣れ、日本と外国の言葉や文化、生活習慣の違いに気付く。
- (4) 日本と外国の生活、習慣、行事などの違いを知り、多様な見方や考え方があることに気付くとともに、日本の文化への理解を深める。
- (5) 大文字、小文字を活字体で書くことができる。

## 5 めざす子供の姿

- (1) 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ姿
- (2) 外国語を聞いたり話したりして、主体的にコミュニケーションを図ろうとする姿
- (3) 外国語の言語・文化に対する理解を深めようとする姿

## 6 研究仮説

英語で思いを伝える楽しさを実感できる活動を取り入れることにより、人と関わり合おうとする意欲が高まるだろう。

コミュニケーション能力については様々な定義があり、文部科学省の有識者会議においては、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義されている。

コミュニケーション能力については、他者とのコミュニケーションの側面を軸としつつ他の側面（創造的思考（とそれを支える論理的思考）の側面、感性・情緒の側面）にも支えられた能力として育成される必要があることが分かる。

コミュニケーション能力は、話す・聞く・書く・読むといった言語活動のほか、非言語による伝達手段（イメージ、音、身体）も含めた広範な活動に関わるものである。このため「コミュニケーション能力」の向上には、言語能力のほか非言語能力の向上も必要である。

文部科学省 HP 初等中等教育局 教育課程課／国際教育課 一部抜粋

### ＜本校が考えるコミュニケーション能力の素地とは＞

- (1) 進んで人と関わり合おうとする態度
- (2) 身近な場面での基本的な音声や表現を聞き取る力
- (3) 身近な場面での基本的な音声や表現を発音する力
- (4) 異文化のよさ（特徴）を感じ取る力

では、このような力を育成するためには、授業の中でどのような活動を取り入れていったらよいか。

### ＜仮説実証の手立て＞

- (1) 場面設定の工夫

Activity では、子供が進んで会話をしたくなる場面を設定し、実生活で必要な英語を使わせる。

- (2) 題材選びの工夫

親しみのある身近な題材（英単語）を選び、子供が抵抗感なく英語を使えるようにする。

- (3) 言語材料の提示の工夫

英語の会話をまず何度も十分に聞かせ、子供が自然に会話をしたくなるまで待ち、自らコミュニケーションができるようにする。教師は、その時間に使う英語の言い回しを丁寧にきちんと繰り返し聞かせ、子供が発音したくなるように導く。

- (4) ALT・CTA の授業協力

良質な英語のインプットを保障し、豊かなコミュニケーションを実感させる。

- (5) ICT 機器の効果的な活用

DVD教材・電子黒板・デジタル教材・CDなどの ICT 機器を効果的に活用し、正しい発音を提示し、子供たちの意欲を高めていく。

## 7 活動の基本的な進め方と評価

### < 1時間の活動の基本的な進め方 >

- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| ① Warm up                   | あいさつ、「Hello song」などの歌                     |
| ② Introduction<br>or Review | 導入・デモンストレーション<br>前時の復習                    |
| ③ Activity                  | 主となる活動（1～2つ展開する）                          |
| ④ Closing                   | 絵本の読み聞かせ・振り返りカードの記入<br>「Good-bye Song」を歌う |

### <活動のポイントと留意点>

- ・音声だけのリピートにならないようにする。子供が、発音したくなるように導く。
- ・Activity は、スピードを競うものや勝敗重視にならないように注意する。
- ・担任は、その時間に使う英語の言い回しを丁寧にきちんと繰り返し発音する。
- ・活動の指示は、日本語が基本である。ただ、使用頻度の高い指示は英語で行えるように Classroom English を全学級で共通掲示する。
- ・振り返りの時間を必ず入れる。

### <評価規準>

#### <コミュニケーションへの関心・意欲・態度>

- ・HRT や ALT・CTA の話す英語を、相手をしっかり見ながら聞いて、意図を理解しようとしている。
- ・HRT や ALT・CTA ・友達と楽しく活動しようとしている。

#### <外国語への慣れ親しみ>

- ・英語を聞いて、まねて発音し慣れ親しんでいる。

#### <言語や文化に関する気付き>

- ・生活・習慣・行事など、日本と外国の文化の特徴に気付いている。
- ・外国語の音声やリズムなどに慣れ親しみ、日本語との違いに気付いている。

### <指導要録への記載（評価）>

- ・英語活動では、数値等による評価は行わないようにして、全学年の通知表には、文章で記述し、指導要録も同様にする。
- ・第1学年から第4学年については、「外国語活動の記録」を設け、学期で観点1～3のうち顕著なものについて文章記述する。
- ・第5学年と第6学年については、「外国語活動の記録」を設け、学期で1つの観点を記述し、1年間で3つの観点全てを記述するようにする。

観点1 コミュニケーションへの関心・意欲・態度

観点2 外国語（英語）への慣れ親しみ

観点3 言語や文化に関する気付き

例：観点1であれば

[ ] に (を)  $\left( \begin{array}{c} \text{積極的に} \\ \text{意欲的に} \\ \text{楽しく} \end{array} \right) + \left( \begin{array}{c} \text{発表した。} \\ \text{参加した。} \\ \text{取り組んだ。} \end{array} \right)$

- ・あいさつや自己紹介などの活動
- ・時間についてのやりとり
- ・英語活動助手 (ALT・CTA) の指示に従って動作する活動
- ・色についてのやりとり
- ・好きなものについてのやりとり

例：観点2であれば

[ ] に慣れ親しんだ。

- ・天気を表す表現
- ・方向を表す表現
- ・果物についての英語
- ・買い物の際の表現

例：観点3であれば

[ ] +  $\left( \begin{array}{c} \text{を知った。} \\ \text{に気付いた。} \\ \text{を理解した。} \end{array} \right)$

- ・外国 (ALTの国) には日本にはない行事があること
- ・動物の鳴き声の聞こえ方の表現が日本と違うこと
- ・日常使っている日本語には英語に由来するものがたくさんあること
- ・同じ言葉でも日本語と英語で発音の仕方が違うこと

「八千代版 CAN-DO リスト」を活用した授業デザインハンドブックによると、現段階では、文部科学省から小学校外国語活動・外国語科における評価の具体的な方向性は示されていない。しかしながら、指導と評価の一体化を目指す上で、責任をもって児童の状態を見取っていくことが必要である。

外国語教育における一般的な評価の考え方と手法  
(参考：小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック)

<評価方法の工夫>

- ① 活動の観察による評価
- ② 授業内の発表による評価
- ③ 児童が書き記したワークシートや作品による評価
- ④ 振り返りカードからの評価

